

博士学位論文審査要旨

2015年2月9日

論文題目： 計量文献学による『源氏物語』の成立に関する研究

学位申請者： 土山 玄

審査委員：

主査： 文化情報学研究科 教授 村上 征勝

副査： 文化情報学研究科 教授 金 明哲

副査： 国文学研究資料館長 教授 今西 祐一郎

要 旨：

11世紀初頭に紫式部によって書かれた『源氏物語』54巻は、千年もの長きにわたり人々に愛読され、また研究対象となってきた。しかし、成立後千年を経た今日でも、研究すべき課題は残されている。その中に、一部の巻の作者に関する疑念と54巻の成立過程の解明がある。

本論文は、文章における品詞構成比率、使用語の出現率、語の長さなどの文章における客観的に計量可能な項目を、主成分分析を中心とした統計手法で詳細に分析することによって、これらの『源氏物語』成立に係る問題について文章の計量分析の観点から解明を試みたものである。

作者に関しては、まず『源氏物語』および『源氏物語』とは作者の異なる同時代の和文体の『宇津保物語』、さらに『源氏物語』の文章を擬して後世に成立した『山路の露』、『雲隠六帖』、『手枕』の3作品の計5作品654741語の文章を統計的に分析し、作者が異なる同時代の作品や、ストーリーに親近性が想定され『源氏物語』を真似て書かれた後世の作品に関して、作者の識別に有効となる分析項目を明らかにした。次に、これらの分析項目を用いて『源氏物語』54巻の分析を試み、作者について疑念の出されることの多い第三部（巻42から巻54）も含め、計量的な観点からは『源氏物語』が複数の手によって書かれた可能性を支持する積極的な根拠は見出せなかったことを明らかにした。

次にこれらの結果を踏まえ、巻45から巻54までの「宇治十帖」と呼ばれる10巻の成立に関して、前半5巻と後半5巻の二つのグループから構成されるという新たな説を提案している。従来、均質の作品内容と文章表現とで統一性を保持していると思われてきた「宇治十帖」の前半5巻と後半5巻との間に、品詞分析等によるかなり明白な違いが見いだされるという指摘である。

さらに、『源氏物語』と『宇津保物語』との比較分析から、『宇津保物語』の巻19「楼の上上」と巻20「楼の上下」が他の『宇津保物語』の緒巻と異なる量的傾向を有し、女性によって書かれた『源氏物語』に近い表現形式であることを明らかにし、『宇津保物語』におけるこの2巻の作者に関する研究の必要性を指摘した点にも本研究の意義を見出すことができる。

よって、本論文は、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2015年2月9日

論文題目： 計量文献学による『源氏物語』の成立に関する研究

学位申請者： 土山 玄

審査委員：

主査： 文化情報学研究科 教授 村上 征勝

副査： 文化情報学研究科 教授 金 明哲

副査： 国文学研究資料館長 教授 今西 祐一郎

要 旨：

土山氏の学位申請に関し、2015年1月29日（木）午後1時30分より公聴会を開催し、申請者による1時間の発表、その後2時30分から1時間の質疑、3時30分から1時間の非公開の口頭試問および判定の審査会を行った。質疑、口頭試問においては、国文学の観点から今西委員、言語学の観点から金委員、計量文献学的手法の観点から村上委員が主に行った。申請者は研究内容および関連する質問に対する確に回答しており、委員会は申請者が博士を取得するに足る十分な学識があることを確認した。

申請者は2012年4月より本学大学院文化情報学研究科博士課程（後期課程）に在学しており、語学に関しては、文化情報学研究科の定める語学試験（英語）に合格している。

申請者は2013年に *Journal of Mathematics and System Science* に *Authorship Identification of Classical Japanese Literature Using Quantitative Analysis* を発表している。また国内の和文誌に4編の論文を発表している。学会発表は海外2回（オランダ、中国）、国内11回である。

以上のことから、委員会は申請者が専門分野における学識、研究能力および研究を遂行するために必要な語学力を十分有していると判断した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 計量文献学による『源氏物語』の成立に関する研究
氏名： 土山 玄

要旨：

本研究は計量文献学の方法を用いた『源氏物語』の成立過程に関する計量的な研究である。統計的な手法を用いて、今後なされるであろう『源氏物語』の量的側面に関する計量的な議論に耐えうる透明性の高い、統計解析による分析結果を示し、これに基づき『源氏物語』において論じられる複数作者説および『源氏物語』の成立に関して計量的な観点から考察を行った。

本研究における計量分析においては、品詞構成比率・語の頻度・語の長さという文書の表現形式に関わる計数可能な要素を採り上げ、これについて統計手法を用い分析を行った。分析は下記の4段階によって構成された。

- (1) 作者が『源氏物語』と相違することが明らかである『宇津保物語』を比較対象とし、古典文の作者の識別に有効な分析項目を明らかにした。
- (2) 後世に成立した『山路の露』、『雲隠六帖』、『手枕』を分析対象に採り上げ、作者は異なるが『源氏物語』の擬作であると考えられる作品を対象としたとき、(1)と同様にストーリーに親近性が想定される場合においても、作者の識別に有効である分析項目を明らかにした。
- (3) 『源氏物語』において複数作者説が論じられている匂宮三帖および宇治十帖を採り上げ、これら13巻以外の諸巻と作者が同一である蓋然性が高いのか、あるいは他作者である蓋然性が高いのか検討を加えた。
- (4) (3)において作者が相違することを指示する積極的な根拠が認められなかったことから、『源氏物語』における第三部の成立過程について、計量的な観点から検討を加えた。

まず、上述したように『源氏物語』と『宇津保物語』を分析対象とし、多変量解析を行った。分析の結果、両作品の間に量的傾向の相違が認められ、特に12品詞の構成比率・助詞の語の頻度・助動詞の語の頻度・動詞の語の長さ・形容詞の語の長さ・形容動詞の語の長さが古典文の作者の識別に有効な分析項目であることを明らかにした。

また、語の長さを用いて作者の識別を行うとき、現代文においては主に動詞が用いられ、形容詞および形容動詞が用いられることは多くない。ゆえに、形容詞と形容動詞の語の長さは『源氏物語』との作者の識別において有効な分析項目であると考えられる。

これに加えて、本研究の分析結果から『宇津保物語』における第19巻「楼の上上」と第20巻「楼の上下」が12品詞の構成比率の分析結果、形容詞の語の長さについての分析結果、形容動詞の語の長さについての分析結果において、主成分分析によって求められた第1主成分と第2主成分から推定された『源氏物語』の95%信頼楕円の内側に付置した。これは「楼の上上」および「楼の上下」の2巻が他の『宇津保物語』の諸巻とは異なる量的傾向を有しており、むしろ『宇津保物語』よりも『源氏物語』に近い表現形式を有していると考えられる。

次いで、作者は相違するがストーリーに親近性があると考えられる場合について検討を加えるために、『源氏物語』の擬作であると考えられる『山路の露』、『雲隠六帖』、『手枕』といった3作品を採り上げた。これら3作品は『源氏物語』が成立して以降に執筆された擬作であり、『源氏物語』のストーリーの延長線上に位置する作品である。

品詞構成比率の分析では『源氏物語』と『山路の露』との間にはいかなる品詞においても顕著な出現率の相違は認められなかった。つまり、品詞構成比率に限ると『山路の露』は『源氏物語』とよく類似した傾向を有していると考えられる。その一方で、『雲隠六帖』は『源氏物語』に比べ形容詞および形容動詞の構成比率が低く、『手枕』は『源氏物語』に比べ形容詞および形容動詞の構成比率が高いという傾向を有していると言える。

また、語の頻度の分析では、『源氏物語』と『山路の露』との間において、低頻度語彙を分析に含めることで、助動詞の語の出現傾向に相違が認められた。『源氏物語』と『雲隠六帖』、『源氏物語』と『手枕』との間においては、延べ語数が1000語未満となる3巻を分析対象から除外したときに、助詞と助動詞のどちらにおいても『源氏物語』の95%信頼楕円の外側に位置するこれは上述の助動詞の出現傾向に作者の相違があらわれるという指摘を支持する分析結果であると言える。

語の長さの分布についての分析では、『源氏物語』と『山路の露』との間において、形容詞・形容動詞の2品詞において語の長さの出現率に顕著な相違が認められた。『山路の露』は品詞構成比率および語の頻度において、『源氏物語』と類似した傾向を有していたが、語の長さの分析において、顕著ではないが『源氏物語』との間に異なる傾向が認められると考えられる。また、擬作3作品に共通して、形容詞・形容動詞の2品詞において傾向の相違が認められる。

『源氏物語』と『宇津保物語』の用いた分析の結果および『源氏物語』と擬作3作品を用いた分析の結果を総括すると、『源氏物語』と『宇津保物語』の間では、12品詞の構成比率・助詞の語の頻度・助動詞の語の頻度・動詞の語の長さ・形容詞の語の長さ・形容動詞の語の長さにおいて、『山路の露』との間では助動詞の語の長さ・形容詞の語の長さ・形容動詞の語の長さにおいて、『雲隠六帖』との間には12品詞の構成比率・助詞の語の頻度・助動詞の語の頻度・形容詞の語の長さ・形容動詞の語の長さにおいて、『手枕』との間では12品詞の構成比率・助詞の語の頻度・助動詞の語の頻度・動詞の語の長さ・形容詞の語の長さ・形容動詞の語の長さにおいて、量的傾向の相違が認められた。

『源氏物語』の第三部に該当する匂宮三帖および宇治十帖は従来から複数作者説が論じられており、本論文ではこの複数作者説について検討を加えた。分析においては、古典文の作者の識別に有効であると考えられる12品詞を用いた品詞構成比率、助詞および助動詞の語の頻度、動詞・形容詞・形容動詞の語の長さを用いて分析を行った。結果、匂宮三帖における複数作者説および宇治十帖における複数作者説を支持する積極的な根拠は見出されなかった。

最後に、『源氏物語』の第三部に対し、品詞構成比率・語の頻度・語の長さを用いて、分析を加えた。品詞構成比率についての分析では、匂宮三帖と宇治十帖との間に品詞構成比率の傾向に顕著な相違が認められ、匂宮三帖は名詞の構成比率が高く、動詞および助動詞の構成比率が低いという傾向を有し、宇治十帖は動詞および助動詞の構成比率が高く、名詞の構成比率が低いという傾向を有すると言える。

次いで、語の頻度について分析では名詞・動詞・形容詞・形容動詞、語の長さについての分析では名詞・補助動詞・形容動詞・助動詞が匂宮三帖と宇治十帖との間において傾向が相違していると言える。このように、匂宮三帖と宇治十帖といった、両グループの間に計量的な表現形式の量的傾向の相違が認められた。

次に、分析対象を宇治十帖に限定し、品詞構成比率・語の頻度・語の長さの分布について分析を加えたところ、宇治十帖の前半5巻と後半5巻との間で、各分析項目において顕著な出現傾向の相違が認められた。品詞構成比率についての分析から前半5巻には名詞・補助動詞・形容詞・形容動詞が相対的に頻出しており、後半5巻においては代名詞・動詞・連体詞・助動詞が相対的に頻出していると言える。

語の頻度についての分析では名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・助詞・助動詞において語の出現傾向に相違が認められる。最後に、語の長さの分布についての分析では、名詞・動詞・

代名詞・助動詞において語の長さの分布に相違する傾向が認められる。したがって、匂宮三帖と宇治十帖との間に認められる相違と同様の相違が、宇治十帖内部の前半5巻と後半5巻との間に認められると考えられる。

また、匂宮三帖と宇治十帖の前半5巻で1つのグループとみなし、宇治十帖の後半5巻と比較すると、12品詞の品詞構成比率、名詞・代名詞・動詞・形容詞における語の頻度に対する分析結果において量的傾向の相違が認められる。

ゆえに、本研究においては、『源氏物語』の第三部と称される13巻について、品詞構成比率・語の頻度・語の長さという文章の表現形式に関わる計数可能な要素を採り上げ、これについて統計手法を用い分析を行った結果、『源氏物語』の第三部には、匂宮三帖・宇治十帖前半5巻・宇治十帖後半5巻という3つの異なる傾向を有するグループが存在すると考えられる。

このように、本研究における結論は、『源氏物語』と作者が相違する『宇津保物語』、『山路の露』、『雲隠六帖』、『手枕』を対象とした比較・分析を通じて、作者の識別に有効な分析項目を明らかにし、これを用いて『源氏物語』において論じられる複数作者説について計量的に検討を加えたところ、複数作者説を支持する積極的な根拠は得られなかった。

次に、『源氏物語』第三部に対する計量分析から、第三部の13巻は匂宮三帖・宇治十帖前半5巻・宇治十帖後半5巻という3つのグループに分類されることが考えられる。特に、第三部の13巻において、宇治十帖の後半5巻は他8巻とは異なる計量的な特徴を有していると考察される。これはすなわち、計量的な観点に基づき、統計手法を用いて『源氏物語』に本文を分析した結果、宇治十帖には量的傾向が相違する2つのグループが存在することが明らかになったと言える。